

タウン誌入門

昭和五四年四月二〇日 初刷印刷
昭和五四年四月二五日 初刷発行

定価 一三〇〇円

編者 田村 紀雄

発行者 川上 和秀

発行所 株式会社 文和書房

東京都文京区小石川三十一三

せんがわ・21 (調布市)

編集・発行人 青野友太郎

新宿まで京王線各駅停車で二五分余りの、首都圏の近・郊外型住宅地である調布市東部の仙川地区に、コミュニティレベルに密着した雑誌が生まれ、今ささやかなれど確かな歩みを始めている。せんがわの空間での、住む人と働き、学び、買物、遊びにくる人たちによる、新しき街・せんがわ(文化と福祉の結びついた街の生活)づくりの試みである。

●新しき街・せんがわ

駅をはさんで南北二・五平方キロに九五〇〇世帯、二・五万人が住むこの街は、三つの大学・学園(桐朋、白百合女子、中央電通)とナショナルブランドメーカー(和光堂、キューピー、栄太楼など)を有す

るとともに、図書館、公民館、児童館、老人憩の家などの公共施設もここ三年間に整備されるなど、コミュニティの資源ストックとしては恵まれた環境にある。また商店街も生鮮食品類を中心に活発で、商圏人口八万をかかえ、今新たな成熟期を迎えようとしている。住宅域は北部に一二〇〇世帯の都営団地がある他は、六〇年代形成の落ちついた家なみが基調で、駅周辺にも農地が点在し、西側の斜面地には武蔵野の自然林が残存するなど、緑豊かな地域となっている。

夕方、都心から仙川の駅に降り立つと、ホッとする、肌の温かみのただよう街だと語る人も多い。新旧住民の確執も余りなかったようで、いわゆる文化的なレベルの高い街である。読書会などのサークル活動も活発で、お年寄り主体の劇団「わざわ座」といったユニークな活動も展開されている。この街、とにかく気に入っている人が多い。でも実際のところ、せんがわは今「素敵な」まちになりえていくかどうか? これがせんがわの生活と文化だといえるものをあげるのは難しい。

この地で晩年の二十年余を過ごした故武者小路氏の邸宅跡が「調布市実篤公園」として開かれるに際して、五二年二三月にまちシンポジウム「新しき街・せんがわ 今日そして明日」が三回にわたって開かれた。第一回「今せんがわでは——その魅力と可能性」、二回目「新しき街とは……そのイメージを拓げる」、最後「新しき街の鎮守の杜——実篤公園の活きた運営を考える」といったテーマでの話し合いがなされ、参加者有志により四月から「新しき街の会」というささやかな集まりが始められた。

そして、この街に生きる人たちの間の意志と情報と活動の交流を活発化し、各人の知恵や工夫を結びつける場として「せんがわ・21」が創刊された。

口絵写真 仙川と音楽

故里 もりしんいち 仙川の街で音楽の 戸田育郎
おまつりしよう 仙川の街で音楽の 戸田育郎
せんがわまちニティカレンダー 10月・11月
わがまち・せんがわーあなたがせんがわで望むものは

●特集1 仙川と音楽●

広大な緑の森や丘が生み出すパワー 間紀 徹
世界の街角に音楽がある 松尾 美
仙川・桐原・音楽 生江義男
「佐々木孝一」寺尾新／阿部実／小沢基弘／
コラム・マイクヘー／神代郎／五十年代ジャズを聴こう

翔べ！仙川っ子

・街なかの公園・を考える

イラスト 学園めぐり

千歳船橋の冒険遊び場

●マップ21●

ファミリードクター お持ちですか？

仙川で健康を支える人びと（マップ）

治療、接客にあたって一言

「薬局店主」施設開から

せんがわショッピングモール／スタンプ加盟店一覧

せんがわ界隈史 第二回

中野明子さん半世紀を語る

公民館・図書館より 東部公民館／若菜園書館

テレビ考 現代妖怪物語・テレビくん 安藤次男

コラム 仙川のベストセラー

くらこみ・まちこみ広場

せんがわ私蔵・公蔵 せんがわまちニティ情報センター趣意

●読者のひろば● 創刊号へひと言

編集長から／編集後記

●グラフィック特集● 保育園のこどもたち

わがチーム 緑ヶ丘ジャイアンツ／若菜小PTAバレーボール同好会

表紙デザイン・山岡義典 版下制作・小沢基弘 写真・柳正裕

レイアウト・野野道子 カット・こやまきょうへい

表紙モデル・ワタナベ恵さん（第22回ミス瀬市）

4 2 12 9 8 6 15 19 16 24 20 28 26 32 30 36 35 34

●「せんがわ・21」のスタイルと内容

隔月刊で週刊誌大のB5判、表紙二色、本文三六〇四四頁、グラフィア八頁、タイプレスタイプ打ちのオフセット印刷。発行部数は五千部で定価無料（カンパ誌代一〇〇円）。各戸への無料宅配を主としている。今後B5判四八頁の号外を出すことによって、月刊情報誌としての機能を高めるとともに、全世帯十αへの配布を実現し、「せんがわのマスコミ誌」として、生活・文化・福祉にわたる地域の総合雑誌を目指している。

本誌の構成と内容については、まず上掲の第二号の目次をご覧ください。メインの特集には、口絵グラフィア四頁と本文七頁をさき、第二特集のマップ21（新しき生活のための仙川案内図）にも六頁をあてるなど、特集ものには相当のウェイトをつけている。創刊号及び第三号では「実篤公園」、「仙川の農業」

の特集を組み、マップ21は「仙川文化の小さな拠点群」（稽古事などの各種教室一覧）、「せんがわ名所一五景」などの企画をしている。

この街の中で書き手を捜し、依頼原稿を増やすとともに、インタビュやアンケート方式を多用して、なるべく多くの人たちの手になる誌面づくりを行っている。テーマや問題意識を共にして、考え発言する場を共有しはじめることが、まず大切なことだと思ふ。鮮明な主張に欠けるとの批判もあるが、一人一人の生の声による「まちコミュニケーション」からこそ、街への総合的な眼くばりがなされ、この街の性格と魅力をつかみ、みんなで共に追求しうるまちづくりのヴィジョンと明確な意志が生まれてくると考えている。

又、「まちこみ・くちこみ誌」として、各個人、サークル、自治会、商店企業、行政に対して絶えず開かれ、人と情報をつなぐ告知・広報のページを、カレンダーやメッセージのかたちで六頁分もうけてある。これらが面白く、とにかく気になる実用的なページに育つことが楽しみで、将来月二回ぐらいの号外が出せるようになれば便利だと思う。今別に考えている「みんなの掲示板・まちネットワークシステム」（現在駅前にある五層敷程の大きな掲示板を、街の要所数カ所に増設整備していくプラン）と連動していければ、手帳で個性的な呼びかけ可能なまちこみネットワークとなろう。

「新しき街・せんがわ」づくりへの魅力と展望を拓くべく、へわがまち・せんがわ（十人の発言、顔写真入り、へせんがわ私論・公論）、〈読者のひろば〉などなど硬軟とりまぜてガンパッテいくであろう。最後に特筆したいのは、裏表紙の〈仙川ギャラリー〉という企画である。本来広告のドル箱であるこの頁も、せんがわのような小さなマスコミ・ニティではスポンサー捜しが大変なため広告としては使わ

ず、地元の芸術家の諸氏の協力を得て、作品と作者の紹介を写真構成で行っている。「せんがわ・21」がいかに贅沢で、かつ格調の高い雑誌であるかは、この裏表紙からもお分かりいただけることと思う……（勿論パトロンがつくことを切望していますが）。

とにかく写真やイラスト、カット、書き文字を生かし、レイアウトなどの編集技術においても一級品を目指して、雑誌メディアの手作りの良さに挑戦している。

●「せんがわ・21」の発行・制作体制

情報というものは可能な限り、絶えず開かれてありたいし、特にまちコミ誌である本誌は無条件に開いていきたいと思っている。故に定価無料（カンパ誌代一〇〇円）というシステムをとりつづけていく。同好雑誌や同人誌ではないので、発行部数もせんがわの全世帯十々に無料配布できる最低一万部を実現したい。つまり購読といった受益者負担的発想ではなく、スポンサー、カンパ、パトロンとボランティアに支えられた、地域の新たな共同財として育てていきたい（将来的にはコミュニティ財団や公益信託の活用も検討していきたい）。

制作費は広告収入に依存する訳であるが、地元の各商店、企業の支援で、創刊号から直接的なコストについては充当できている。今後、カンパ誌代（一冊一〇〇円）、維持読者会費（二〇千円）などの読者側からの支援も着実に伸ばしていきたい（会計—収入の部及び維持読者氏名については毎号誌上に報告している）。

編集会議はいつも公開で、第一と第三日曜の昼に公民館で、又第二と第四土曜の夜はスペース・仙川（わざわざ座の本拠となっている小劇場）という場を借りて開いている。編集スタッフは、十八歳と五十

歳ぐらいまで、会社員、主婦、学生、自由業などの十名余で、大体三、七名出席のささやかな集まりである。

執筆、編集、広告取り、配布などの諸活動を基本的に全てボランティアでやっている。ただし、今後の安定した刊行のためには、半専従的なスタッフが二名ぐらいは必要と思われる、どんな制作体制がふさわしいかはこれからの課題である。第二号からは版下制作までスタッフで行ってみるとともに半専従を一名置いている。

宅配はスタッフが分担して、二、五軒に一冊を全くアトランダム配布。五十枚程の発刊お知らせのポスターを貼り出して、宅配に当らなかった人は、各書店、広告掲載店、公民館、図書館で受けとってもらおうシステムにしている。

●新しき街づくりへの魅力と展望を拓く

誌名の「21」は21世紀への展望と21時（午後九時）からの生活空間の広がりという意をこめている。今まで、私たちは遠くの方ばかり眺めていて、自分の足もとにころがっている、一番大切なものをみようとしなかった。今私たちは、自分の住む街とそこの生活をいかなるかたちで織り上げ、そして次代の子どもや孫たちに伝え、ゆだねようとしているのか。

この世紀末を21世紀に向けて拓くために、日本の各地で、ひとは、むらは、まちは、今己の「風と土と心」を問うことから、各々の歩みを始めている。

せんがわ人は、昔から人の足を引っ張ることを余りしないという。確かに本誌はまだ歩き始めたばかりだが、暖かい支持を得て、今このせんがわの街で新たな触媒として、熱を発し始めている。とにかく「まちコミ誌」として、ユニークな地平を切り拓いていきたいと思う。